

「国際学術交流セミナー」

慶南大学校・極東問題研究所への訪問記

和田 宗久

2005年11月10日から13日にかけて、私は神奈川大学の国際交流事業の一環として、韓国の慶南大学校と極東問題研究所を訪問した。今回の国際学術交流では、本学から、川田昇教授（法学部）を団長に、横倉節夫教授（外国語学部）、田中則仁教授（経営学部）、郷田正萬教授（法学部）、山田徹教授（法学部）、橘川忠俊教授（法学部）、三浦大介助教授（法学部）、そして私の計8名が参加したが、短期間であったにもかかわらず、政治、法律そして経済など、様々な分野についてたいへん有意義な学術交流が行われた。以下、この場をお借りして今回の学術交流の概略について述べたい。

最初に訪問したのは慶南大学校である。同校は、釜山から西に車で1時間ほどの馬山という都市にある大学である。韓国の大学としては中規模の大学ということであったが、私からすれば、山一つがまるまる大学という感じであり、日本の大学と比較すれば非常に大規模な大学に感じられた。同校では、11月11日に「日・中・韓国際学術セミナー『世界化時代の東アジアにおける法、政治および経済』」が開催され、慶南大学校の法学系教員と本学の教員を中心に、東アジア文化、日韓を中心とした東アジアの経済環境、そして民商法、刑事法、環境法、経済法といった分野にかかる近時の各国の動向についての紹介とそれらに関する活発な討論が行われた。とくに、日・中・韓の法分野に関しては、従来からとくに民商法や刑事法について共通する部分が多かったものの、1990年代後半から各国において様々な改革が行われ、多様化が進展してきている。各国の法改

正の動向やその背景事情にかかる説明とその後の討論は、われわれにとって非常に参考となるものであった。また、同セミナーの最後には、現在の日・中・韓の間に様々な外交的問題があることは認識しつつも、経済や法制度面における各国間の連携の必要性が増していくことは間違いなく、今後も今回のセミナーのような学術交流を継続し、より活発化させていこうということが確認された。



日・中・韓国際学術セミナー会場にて

翌12日、われわれはソウルに移動して、極東問題研究所を訪問した。同研究所は、慶南大学校がソウルに設置している大学院を兼ねた研究機関である。同研究所は、大統領府の隣という非常にすばらしい立地の上に建てられており、近年には、建物自体も新しくされたということであったが、教室も大小様々なものが用意され、図書館も日本を含めた各国の多分野に渡る資料が豊富に揃えられていた。こうした立地や施設をとってみても、同研究所の韓国国内における位置づけの高さが十分に感じられたが、それだけでなく、同研究所では一般の学生や、韓国の

自治体や政府の職員を受け入れているのみならず、北朝鮮（朝鮮民主主義人民共和国）の政府関係者も頻繁に訪れ、共同で教育・研究活動が行われているということであった。同研究所の尹大奎所長からは、北朝鮮では、一部の地域において経済特区という形で市場経済化が進められており、それら地域における法制度や行政システムなどの整備について、同研究所がある種ブレインとしての役割を果たそうとしているとの説明を受けた。韓国・北朝鮮両国が実務レベルでそのような交流を既に深めているといった事実は、日本ではあまり報道されておらず、そのこと自体、われわれにとっては大変な驚きであったが、慶南大学校と極東問題研究所が、一般的な研究や教育のみならず、政策決定や法制度整備といった実務レベルにおいても、十分なアウトプットを出していることに、私自身は大きな刺激を受けた。

また、われわれは、慶南大学校においても、極東問題研究所においても、多くの教職員や学生の方々から、大変温かいもてなしを受けた。セミナー等が大変有意義なものであったことは前述したとおりであるが、それ以外の会食等の場においても、お互いの国の現状や自身の研究テーマについて数多くのことを話したり、また、ときには両国の歌を歌いながら、大変楽しい時間を過ごさせていただいた。加えて、個人的なことで恐縮であるが、私自身は、様々な議論をした際に感じられた韓国の大学における若手教員のレベルの高さ（ほとんどがヨーロッパ等の有名大学において博士号を取得しているそうである）についても大変刺激を受けた。



極東問題研究所にて

最後に、これまた私自身の話で恐縮であるが、私は今回のような国際交流事業はおろか、日本以外の土地に行くこと自体初めての経験であった。また、神奈川大学の専任教員となってからまだ2年しか経っていない私にとっては、3泊4日の間に多くの韓国の先生方のみならず、本学の先生方とも学問その他様々なことについてお話をさせていただき、本当に貴重な経験をさせていただいた。本学における慶南大学との交流の歴史は、1980年代後半にまでさかのぼるそうであるが、今後とも、今回のような刺激をお互いに与えあうとともに、有意義な学術交流を継続させていけるよう、私も微力ながら尽力させていただきたいと思う。

（法学部専任講師）